

第29回 大阪府学校教育審議会 概要

日 時：平成20年6月3日（火）13：30～16：10

場 所：ホテルプリムローズ大阪 「鳳凰（東）の間」

出席委員：竹内会長、米川会長代理、泉（薫）委員、大國委員、尾崎委員、志水委員、
齊藤委員、千本委員、森田委員、横井委員、吉村委員、脇本委員

◎：会長 ○：委員 □：事務局

<前半>

◎：1、2章は、事実が中心であるため、本文に該当するのは第3章だと思う。主として第3章についてご議論いただきたい。どこでもいいが、前半は第3章の21から23Pを中心にご意見賜りたい。

1つ伺いたいのが、23P「歴史的にも進取の精神」、「教育に熱心な人々の心意気」とあるが、具体的にどういうイメージか。

□：古い歴史の中で民間の力で学びを支えてきたことを指している。

◎：具体的に書いてはどうか。江戸時代にさかのぼるのもいいが、明治以降でも事例があれば書いたらよいのではないかと思う。

○：この審議会の諮問は今後の教育の方向性を打ち出すということは理解している。現在、公教育に対する信頼が揺らいでいる。その原因は1、2章に現れていると思う。その克服にむけて審議会としてどのような答えを出すのかが第3章だと思う。しかし、観念論が中心であり、反対する人はいないと思うが、抽象的で、ここに出されていることがなされた場合、どういう子どもに育つのか分かりにくい。教育は数値で測れない部分も多いと思うが、具体的に何を指すのか、分かるように入れ込むべきと思う。知事は教育日本一といっているが、学力テストで1位になるのか、教育環境が1位なのか、分からないが、そういったスローガン、目標を書いたほうが良いと感じる。

また、教育の目標は、子どもが大人になって、自立し生活するための基礎、的力をつけることだ。それは、読み書き、算盤、IT能力、社会規範だと思う。そういうものをどのレベルにしていくのかという、我々の志というものを書いたほうが良いと思う。

◎：経済の場合は数値化しやすいが、教育の場合は難しい部分もあると思う。確かに知事の教育日本一はわかったようで分かりにくいと私も感じる。

○：読ませていただいて、学校の役割について改めて考えさせられた。34Pでは学校は学びと育みを「支援する」し、22Pでは「地域が学校を支える」とある。誰が子どもの教育に責任を持つのが明確になっていない。地域なのか、家庭なのか。

責任を負うべきところが見えてこず、学校が第三者的にかかれているように思われ、違和感を持った。

また、24Pにある必要な学力についてだが、「基礎基本の確実な習得」「課題を解決する力」「自ら学ぶ態度・意欲」「自己受容感」が大切とかかかれている。「基礎基本の確実な習得」以外の学力についての指導法が確立しているならば、それを知りたい。また、基礎基本の上に、課題を解決する力があるもので、それを並立で論ずるのはおかしいと感じる。

多様な選択の必要性については、そのとおりかと思うが、いろんな特性をもっている子どもの個性をどのように引き出すか、どのような個性を伸ばすかについて、具体的に検討したことがあるのか。最終的には社会的に自立して貢献していける人間にするのが目的だと思う。複数の選択肢は必要だと思うが、生徒や保護者などのニーズには全部応えることはできないし、応えてはいけないものもある。これまでニーズの検証はしてきたのか。ただ、学校をさぼらない、退学させないというためだけの選択肢の設定ではいけないと思う。

教育改革プログラムの反省の上に、今後の10年を検討していくと思うが、気になるのは競争原理批判。今でも偏差値偏重主義を批判する人は多くいるが、世間ではもはや偏差値は通用しない。それは破綻してしまっており、良い大学を卒業しても良いところに就職できるとは限らないし、就職したとしても定年まで勤められるとは限らず、様々な場面で再チャレンジが迫られる。そういったことに立ち向かう力をつけさせることが必要。学校はあくまで勉強を教えるところであり、とことん勉強したい子どもを支える仕組みが今の学校にあるのか、多様な選択肢といいながらも、一生懸命勉強したいというニーズに対しては腰が引けているのではないかと感じる。

- ◎：大阪はわりと卓越性（エクセレンス）を保証してきたと思うが。戦後の大衆社会は極から極に動く傾向があり、エリート教育というと大変なことになった時期もある。これは私からの提案だが、今後の10年は学校の力が大切になるということをこの答申の前面にだしてはどうかと思う。
- ：教育改革プログラムの中には、家庭の教育力を高めるための支援があるが、それにはどんな結果が出たのか。現状、学校現場はクレーマーな保護者の対応が大変であるが、そのあたりが、非常に緩やかな表現になっている。こういうことで、本当に子どもの教育ができるのか。会長がおっしゃったように学校というものの打ち出しを明確にするべき。学校が何でもやってくれる、学校には何でもいい、という現状では教員が安心して教育に打ち込める場になっていない。しつけは家庭のやくわりであり、抽象的な言葉でなく、学びであるはずの学校について、府民に明確にうちだせないか。
- ◎：答申はある意味抽象的なのは悪いことではないと思う。全てが抽象的で良いわけで

はないが、それを踏まえての具体的な取組み、施策が重要。保護者に対する考え方も入れ込むこともありかとは思いますが。

- ：教育にはお金がかかるということを明確に示す等、もう少し過激でも良いとは思ったが、具体的に書いて良い点もある一方で課題もあると思う。

強調したほうが良いと思う点を示させてもらおう。33Pの教員の力だが、変化の激しい現代、教育に関し新たな課題が様々ある中で、どのような教員の力を引き出すのかについて。今までのように経験のある教員から学ぶと言うだけではなく、新たに対応策を作っていないといけない時代になっていると思う。従前からの保守的なアイデアに凝り固まるのではなく、変化を生む力を重視してほしい。授業評価もあらたな授業を生み出すものであるべき。学校は変わらないものではなく、どのように変わっていくのかというビジョンを入れられたら良いと思う。

全体の構成だが、第1章は教育を巡る状況、2章は取り組み現状課題について書いてあると思うが、教員の年齢の不均衡が2章でしか書いていないのはどうしてかと思った。1, 2章の位置づけの違いについて教えてもらいたい。あと、22Pの3つの観点についてだが、3つに絞らず、4つめとして自律的な学校づくりをいれたらいいのではないか。また、この3つの観点と24P以降の6つの重点事項との関係を教えてもらいたい。

- ：1章と2章の差については、若干分かりにくい面もあるかと思うが、1章は各論に入らず、全体の状況を概観するもので、2章はこれまでご議論いただいた6つのテーマに沿って、その状況と課題を記載させていただいた。答申の構成についてもご意見をいただけたらと考えている。

6つの重点事項については、テーマごとに書かせてもらっているが、3つの観点は全体を通じたもの。

- ◎：全体の方針について意見をいただいたが、ひとつは公教育の答申であるべきであるため、様々な目配りが必要だと思う。私学なら非常にクリアーな目標がたてられるが、基本的には多くのことに対応するため、抽象的な表現でもしかたないと思う。ただし、具体的な提言ができるところはする。そのような方向にしたらどうかと思う。

<後半>

- ◎：非常に重要な意見も3ついただいたが、次に文章化する時に活かしていかなければならない。

- ：こういう教育をすべきという点ではよいが、学校がどう変わるかという視点が欠けているように思う。例えば、「チーム力の向上」が地域の中に入っている。校長のリーダーシップもそこには書かれてはいるが、地域に向けての学校教育とか、地域に向けての意識というふうに読めてしまう。【p34】学校運営という点では

学校全体がどう変わるべきかという視点で書いてもらいたい。「教員」のところで気になったのが【p31】指導育成→養成→確保と並んでいる。どこかで誰かが勝手にやってくれるというイメージがする。自分たちが学校の中でどうしていくのかというのが余り出てこない。自分の学校をどう変えていくのか、どうあるべきかを自立的、自主的に考えていただきたい。もう少し学校の中でどうしたいか、どうすればよいかという夢を押し出してもらいたい

- ：自分の担当（「地域とつながり信頼される学校づくり～「チームの力」の向上～」）についてお話をしたい。肝心の教職員集団、学校のチーム、教職員集団としてチームワークをもって教育にあたらなければならない。文章的に言うと、【p34. イの1項目】「学校が組織的に機能していくためには、学校組織として、教育目標を掲げ、その実現に努めることが必要。」についてはいいと思う。『学校改善のためのガイドライン』の最初に「一番大事なのが気持ちのそろった教職員集団」。「教員集団がまとまるのが一番大事」と書かれてあって、私もそれが一番大事だと思う。例えば言葉として、「まとまりのある、気持ちの揃った教職員集団が必要」を出したいと思う。そして、教職員集団のところにも書かれているが、チーム力を生み出すリーダーシップとか、信頼感に基づくチームワークとか、学び合い育て合う同僚性とか書いてあって、そのまま使う必要はないが、【イの2項目目】の部分を「・・・ミドルリーダーを育成し、信頼感に基づくチームワークを育てて、学び合い育て合う同僚性等を築き上げて、教員の学校組織運営への参画意識を高めていくことが必要。」というように、組織や教職員集団の在り方とか、或いは、どういうふうにそれをしていくのかが書き込まれていくとトーンとして、地域だけのことではなくて、基本は教職員集団であることが分かるのではないかと思う。

もう1点【p35. オ】の校務の効率化ところで、言葉として、「・・・時間を確保するため、校務の在り方を見直すとともに、IT環境を整備・充実させて、その上で、IT機器・・・」にしてはどうか。校務の現状や在り方を見直して、給食費の督促とか、教育以外の校務を先生がしなければならぬかを見直した上で、IT環境自体が各学校にプリンターが1台しかなくて待たなければならないというのじゃなくて、整備・充実させて、その上で、書けばよいのではないか。余分だが、【アの3項目目】は「・・・進めることが必要。」ですね。

- ◎：委員が言われたように、学校作りは独立させて、もっと学校の教育は全てではないけれど、学校というのは大切だということで、ここだと地域との関連で言っているけれど、学校のチーム力の向上だけで全面にしていっていいと私も思う。
- ：目次全般。「状況」が続いている。状況があって、課題があって、色んな方向性がある、ということだと思う。「義務教育をめぐる状況と課題」とか「状況の中の課題」と「課題」を付けた方がよいと思う。

H10年に作られた前の答申がどの程度実現しているのか、していないのか決算報

告のようなものをして、その結果、どこが問題だったのかというのが欲しい。最初に少しはあるが。前に掲げた目標が実現したのか、しなかったのかがあって初めて、今回の答申につながってくるので、そのことを念頭に答申をまとめて欲しい。後半について【p 21】の枠の中。中教審の指摘を転用しているが、自分の言葉で書いた方がよい。

全般的には、第1章が状況で、第2章が課題。第2章と第3章の対応は分野的にはよく分かる。しかし、少し機械的かなという印象を持つ。第1章・第2章の帰結として6点の重点事項があるのかなと思うが論理性が乏しい。せめて論理的な帰結に近い形にする作業が必要。分かりやすいキャッチフレーズが必要。例えば「学校と子ども」どういう子どもを、学校がアウトカムとして望むのか、そして、そのエッセンスがキャッチフレーズ的に出れば分かりやすい答申になると思う。

- ◎：行政用語もかつては威厳があり大切だったが、対立する用語として「電通」用語（キャッチフレーズ）・・・たとえば「学校が輝く大阪」などが必要。目次も工夫して欲しい。同じ言葉を何度も使うのは避けて欲しい。「状況」が何度も出てくるのが目障り。全部「状況」を取ったらいい。【p 31】「教育は人なり」は当たり前。「企業は人なり」なら意味がある。【p 38, 14】「このことは、歴史が証明している」についても、事例でも入らないと意味がない。言葉に力がない。具体的に言ってくれたら理解しやすい。Attractiveな、ある程度、力のある言葉を使って欲しい。
- ：この審議会答申を踏まえて具体的な施策を展開されていく。そういう意味では、教育委員会が改革の具体的な施策がしやすいインパクトのあるようなものにしてはどうか。そういう意味では、もっともインパクトがあると思われるのは、「知事は教育予算削減と言っているけれども、やっぱりお金を使わなければならない」ということを表に出して新聞記事になるようにまとめていければと思う。そのことは実は「まとめ」の上段に書かれてあって、これが具体的な施策のところへいくと、課題はたくさんあるけれども「学校の先生がんばって」みたいなことであろう。そのためには府として一年間予算を確保ということが読み取りにくい内容になっているのかなと思う。最後のまとめのところで「予算も付けてね」みたいなことを書いている形になっているのかなと思う。具体策のところでもメッセージとして分かるようにして、それを具体的な教育ビジョンの中で教育委員会として展開していくようにしていただきたい。
- ：広範囲にわたって私たちの言葉をつないでいただいている。これから教育施策を打つ時に、ここにこう書いてあるという形でいっぱい使えるものになっているという気がした。この間色々なことを協議してきて、行政主導での改革をしてきたと思う。今の段階では学校自身が自立的に子どもの状況をとらえて、学校の特色づくりをして、こういう教育をしていくということをしっかり立てていく段階に入っている。各論のところに入る前の部分でもそういうことに触れて書いていただいた方がむ

しろ学校も元気になるのではないか。

義務教育のところを中心にみたが、義務教育の前の段階で3つの観点があった。そのうち【p22. イの2項目目】「そのためには、多様な選択を可能にする教育内容と・・・」とあるが、高校教育だけじゃなくて幼児教育のことがここには直接書かれていない。幼児教育や支援教育を考えた場合、「多様な選択」というよりは「多様な学び」ではないかと思う。「選択」とすると範囲が狭くなる。小学校でも授業の中で、まず自分で考え、その考えを発表し、色んな発表を聞いて集団で練り合っ、て、よりよいものにするという筋道を大切にしている学校が多くある。その中では、36人いれば36通りの考え方がある。

【p23の2項目目】「社会の形成者として・・・」は大切なことではあるが、この会では、社会をよりよく変革していく姿勢が大事だという意見も出ていたと思う。従って、「社会を支える態度をはぐくむ」のところを「よりよい社会をつくっていく」積極的な言葉の方が審議会の答申に合っていると思う。

【p24. アの2項目目】「読み、書き、計算・・・」というのは絶対に重要というのは共通理解とした上での話のだが、基礎基本という場合、今は「読み、書き、計算」だけではない。各教科の知識・技能を全部ひっくるめて基礎基本と言っているかと思う。大阪の子どもたちの学力と言った場合、基礎基本はある程度習得しているけれども、解決する力が弱いんじゃないかというふうに以前は捕らえられていた。今回の結果では、基礎基本の定着もついてきていないと思うので、ここは「読み、書き、計算」というか基本的な知識・技能かと思った。

【p25】授業改善について、小人数指導と習熟度別指導だけを取り出しているのは、何か今後のことを考えてのことだろう。しかし、このままだと教科も限定されてくるし、これ以外のこともしているので、「個に應じて」という表現が欲しい。また、「・・・学校全体で行う組織的、計画的な授業評価も重要である。」とある。それは確かに大切だが、授業改善も学校全体で組織的に行わなければならない。

◎：【p24】基礎基本は基礎知識なのではないか。私は、基礎的な知識とそれを応用できるか、ということだと認識しているが、また、事務局でご確認ください。

○：私の読後感としてはできるだけ「大阪カラー」をにじませるようなタッチにして欲しい。

【p21】枠は要らない（人口のことなど）。図表入りでの解説が必要。【p22】枠内で同語反復＝「地域に根ざす」というのが「地域性」だし、「互いの違いを認め合いながら」というのが「多様性」であるので、ここの表現は適切でない。また、順序として「地域性」が先で「多様性」が後ではないか。注意すべきは「多様性」ということで、大阪が大切にしてきた「多様性」というのは、学校の中で互いの違いを認め合っ、て一緒にやっていくようなニュアンスが強かったと思う。もちろん個に應じて選択肢があるのも大切だと思うが、地域性については説明の必要はない。

多様性については注釈がなかったので説明する必要がある。

「地域性」・「多様性」という2つのキーワードから、ア～ウの3つの視点が出てくるわけだが、先ほど言ったように「多様性」を捉えるならば、「子ども一人ひとりの力を伸ばす」というのは多様な選択というこれまでの流れにつながっていると思う。しかし、違った者同士が会って力を作っていく。大阪の人間というのはオーラルの力というか、コミュニケーション能力に長けている。その部分が学力テストになれば全国トップになるなと思う。コミュニケーション能力、異文化リテラシー、人と関わる力というものをここに謳われているように大阪らしく入れてほしい。

【p23】ここが浮いているように思う。2(2)「大阪の子どもたちにはぐくみたい『力』」が先にきてもよいのではないか。p22と23を入れ替えてはどうか。

【p34のイ】＝「地域とつながる」と「チームの力」は別問題なので書き分けたほうがよい。

《杉並区訪問の話＝地域運営学校》校区はないが阿佐ヶ谷が基盤であった。近所には総合病院の院長さん、園長さん、お寺さんたちがいる。地震が起こるといって危機感があって、学校と大地主と5者で地震が起こったら子どもを集めようという計画を立てている。東京は競争論理だが内実頑張っているなという印象。大阪では競争論理でなく大阪版（学校教育自己診断、学校協議会）でやっている。大阪カラーをちりばめてほしい。

○：【p21】中教審を取っ払って大阪独自で問題点を記述すべき。課題別に第1章と第2章をまとめてはどうか。もう少しつなげた形はとれないか。

【p31～33】はp17・18に対応する形になっている。p17・18では数と資質しか取り上げていないので、もう少し社会的な問題点（クレマー、教員のウツなど）を書き込んで、社会的な対応の変化を書いてはどうか。そうすることで、

【p31】の表題も「教員の力を最大限に引き出し、学校のチーム力を高める仕組みづくり」というように、教員個々人の力だけではなく、個々人の力をまとめた学校全体としてのチーム力、組織力というものの向上もここに入れられてはどうか。学校の自立的なチーム力の向上もここに総括的に入れれば社会的な問題への対応力も浮かび上がってくるので、もう少し整理してはどうか。

【p35】「校務の効率化」のところで、ITの問題だけではなく、「子どもと向き合う時間を確保する」の部分もp31に絡めて、授業力の向上というのも、単に授業力だけが上がればいいというのではなく、授業力以前に、子どもの変化を見抜くとか子どもを育てる力が要求されてくるので、そのへんを育てるための資質という点で言えば、無駄なように見えるかもしれないが同僚と話したり、学校全体で子どもたちのことを語る時間を有効にひねり出す、とういうことをp35までに入れればと思う。

◎：ここで、本日欠席の委員からのメッセージを照会する。

◆指導が不適切な教員への対応（33ページあたり）

- ・議論の際に示された、小中学校で、指導が不適切な教員の数が、かなり少なかったと思う（H19 36名）。
- ・校長や市教委が報告しにくい雰囲気があるのではないかと（人数が多いとペナルティーがあるのではないかと。とか、校長の指導力が不足しているととられるのではないかと。とか）
- ・まず、「指導が不適切な教員」と認定したら、メリットがあって、その教員を指導して改善できたら、更にメリットがあるといった仕組みがあれば、正確な人数が把握できるのではないかと。
- ・そのような仕組みを作っていってほしい。

◆小学校教員採用試験の倍率の低下について（32ページあたり）

- ・小学校の教員の募集人数は増えているが、一方で、母数が増えていないと思う。
- ・これは、大阪府教委の問題ではないが、中学校、高校の教員免許は、他学部からでも比較的とりやすいが、小学校はなかなかとれない。
- ・近畿大学の場合、小学校の教員免許をとろうとすると、1年生の時に申し出て、提携している短大の単位をとらないとなれない。
- ・途中で小学校の教員になろうと思ったら、認定試験を受けないと免許はとれないが、その認定試験はかなり難しい。
- ・今後、5年くらいは大量採用が続くと思うが、なんとか母数を増やさないと、いい人材を確保するのは難しいのではないかと。
- ・そのためには、教志セミナーもいい試みではあるが、根本的な母数の問題がある。
- ・これは大阪府教委だけではどうすることもできない問題ではあるが、課題意識としては持っておくべき。

○：教育行政のこともありますが、全体のことでいうと、メインテーマは2つであると思う。「学校力UPして夢をはぐくむような教育」というキャッチフレーズで。学校力のUPのために何をするか、夢をはぐくむために何をするか、というところで最後にまとめられないかと思う。

【p36のA】がどうしても浮いてしまう。道徳教育が悪いというのではないが、人権教育とか弱者に対する教育をフレームアップした方が大阪らしい教育になっていくのではないかと。道徳教育というと、どうしても上からというニュアンスが大阪ではあるので、そのあたりを少し考慮していただけないかという気がする。ここまでまとめられたので、最終の全体のまとめとして、子どもの部分と学校力をどうUPさせるか、子どもたちの夢を具体化させるためにどういう手立てを講じるのかを、もう一度おさらいのように並べてもいいかと思う。この2つのことを焦点化すれば魅力的になると思う。

○：高校教育について依頼された。「入れる学校」から「入りたい学校」「入ってよかつ

た学校」という言い方には、ニーズに添えていきますというようなニュアンスが感じられ、最初から受け入れにくい気持ちがあった。これまでも色んな意見が出たと思う。たとえば様々なコースを作ったけど、結局わかりにくくなって、中学校の指導する側から見ても、理解しきれないという現実が指摘された。そのことは13頁に書かれているが、p27以降には反映されていない。迷わず前に進みますという姿勢で書いてある。審議会が始まった頃に“たたき台”として審議のポイントとしてクリップが出たが、高校のところはまったく変わっていない。他のところは変わっている。これまでの議論は何だったのかと思うが。

- ：全体的には各項目とも先生方のご意見を反映させてもらっているが、第2章の課題のところと今後の方向性で若干書き分けているところがあるので、いただいたご意見を課題には書いているが、方向性には書けていないというようなことが項目によってはあるので、全体のバランスをもう一度精査をさせていただく。
- ：【p36のア】(6)の内容全般を見ると、道徳や人権ではなく、社会分野から学ぶとうことに焦点を当てた意味で、このように書かれたのかなと思っている。確かな学力も大切だが、【p7. 4】の府民意識にあるように、善悪の判断の教育を望んでいたり、現在のマナーの悪さなどから、そこに対して、こころをはぐくむために意識改革が必要なのだというところで推していくことが大切。だから【p36のア】は「取組みとして」というタイトルだけでいいと思う。「道徳教育を通して」とか「人権教育を通して」ということばの枠にはめこむのではなく、これから必要である取組みとして、府民も望んでいる「こころの育成」としての取組みとしての動きだと思う。
- ◎：今、道徳教育というよりも、公共心とか公共圏の育成とか、大阪というコミュニティ意識も結局、一種の公共圏みたいなものではないか。的確な用語として何がいいのか。個人が公共心みたいにつながるといふか、人と人とのつながりとか信頼とかいうことだから、道徳教育は古い、或いは、ピントがずれている気がする。この問題については、事務局の方からも言われているように、個別に対応し文章化していくというステップがいいと思う。時間もないし、多くのことをいっぺんに語りにくいこともあるでしょう。今日のご意見と事務局からご意見をお伺いに行くということになっています。全部でもいいんですが、ある程度ご専門といふか比較的関心が近いところで原案を作らせてもらった。もちろん他の分野も意見を出してもらっていい。披露させてもらう。今日のご意見と個別対応での意見を踏まえて文章化していく。次回それで合意ができれば終わりになるが、得られなかったら別の日にやるとか別の方法を考えなければならないが。